

## 観光地の立地条件

小松原 尚

はじめに

- 1 観光地立地の自然条件
- 2 観光地立地の社会条件
- 3 観光地への関心と評価

まとめ

はじめに

20世紀初頭、それまでは考えられなかった場所に忽然と現れた都市、その状況を目の当たりにしたアルフレッド・ウェバーは、人はなぜ都市に集まるのかを考えた。そして彼は、そのメカニズムを考察し、工業立地論を著したのである（ウェーバー 1986：2 - 3）。

ウェーバーの「立地論」を平易に表現すれば、「なぜそこにそれがあるのか」という疑問文である。本稿の課題に則して言えば、観光地の存立要因を問うということである。そもそも立地は立地条件と立地因子の関係で決まる。立地条件とは、その場所あるいは地域にある特徴の中で、企業の工場や店舗などの立地選択の際に有利に働く要因である。一方、立地因子は企業の経営戦略の中で、工場や店舗の進出を決定する際に重視する要素である。当然のことながら、企業にとって重視する要素とは、その地域を選択することで最大利潤をもたらすと考えられるものである。

上記の脈絡から考えれば、観光サービスを提供する場としての「観光地の立地」とは、観光客を誘致しようとする観光地の立地条件、例えば、自然観光資源の希少性、交通連絡の利便性、地元自治体や関係者から提供されるサービスの質などと、需要者の興味・関心、費用負担と効果の関係などの立地因子との折り合いによって決まるものである。

ウェーバーの時代は自由に移動できる人間は少数であったし、場所に関する情報入手方法は限られていた。それから100年余が経過した現在、多くの人々が自家用車をはじめとする移動手段のイノベーションの成果を享受し、インターネットなど情報通信革命の恩恵に浴しており、観光地の立地条件にも大きな影響を与えている。

そこで、以下においてはまず、① 自然環境の観光利用に関して、環境保全との関連を整理し、その後で都市生活者にとっての都市内部と遠隔地、地域それぞれの観光・レクリエーション地としての位置づけを確認していく。次に、② 近代観光の形成過程における都市の位置づけを確認し、観光地としての都市の内部構成と縁辺地域のその利用にとって重要な要素としての交通手段について考える。最後に、③ 社会条件の変化と観光客流動の変化、観光行動の契機となる都市生活者の意識・関心および、観光地の評価に関して論及する。

### 1 観光地立地の自然条件

#### (1) 山岳と水辺の観光利用

日本列島は世界の地体構造の中にあって変動帯に位置づけられ、火山や急峻な山岳地形、海岸部にあっては出入りの大きな海岸線や砂浜が自然景観的な特徴をなしている。これらはわが国の自然観光資源の特長ともなっており、国内の観光需要のみならず、外客誘致のセールスポイントでもある。以下ではその利用についての考察を紹介しておこう。

まず、自然環境の保護・保全そして持続的な観光利用の立場からの研究が、数多く発表されている。その中で、山岳地域における観光客の増加と国立公園の自然環境保護に関しては、渡辺・古畑（1998）が、大雪山国立公園にお

## 観光地の立地条件

ける園地の利用に関して、遊歩道の整備の目的を土壌浸食の防止や植生の保全に主眼をおき、公園の環境保全のためには入園料の徴収とその方法に工夫をこらす必要があることを論じている。また、横山（1998）は中部山岳国立公園における事例をあげながら、立山黒部アルペンルート上の道路など交通路中心の観光開発から、交通手段やホテルでの食財の加工、浴室用品の選定についてもきめ細かな対応がなされるようになりつつあることを報告している。

ところで、わが国にあっては、大陸の大河川に比べて流域面積に対する平野の割合が大きいという自然条件を有している。そして、河川下流部の沖積平野には都市が形成されてきた。小松原（2002）では石狩川水系豊平川を事例として、流域に生活する住民による河川のレクリエーション利用に関して意識調査をもとに考察した。この点に関しては、行政側も河川改修の手法にも工夫をこらすとともに、その内容を広く国民に印象づける活動を行なっている。こうした活動は、利用促進のためのサービス供給側からの工夫の一つとして評価できるが、次世代を担う高校生たちへのアンケート調査の結果と行政の意図とにはその認識に格差があることを示している。

### （2）観光客の季節的偏り

わが国の四季折々の変化、緯度差による気候帯の多様性は観光の季節的変化や集中に大きな影響を与えている。そして、国土の縁辺地域はこうした点を考える上で典型事例となり、小松原（2005）では、北海道を事例にこの課題に取り組んでいる。

すると、統計利用上の工夫を施しつつ、全国と北海道との月別の旅行頻度の1年間の構成を比較すると、全国では梅雨から初夏にかけて落込んでいるのに対し、北海道は梅雨から夏季に観光客の需要が膨らんでいることを明らかにしている。さらに、北海道内の観光地でもこの傾向が顕著な地域と比較的季節的偏りの小さいところがあることを観光客入込み調査報告を活用して数量的に明示した。そして、自然環境との関連を示せば、海水浴場を含む海岸線、人造湖を含む湖沼などの水辺観光地、さらに大雪山などの山岳地域の利用は夏季集中になっていることを指摘している。

また、多くの観光地がオフシーズンとなる冬季にあっては、スキー観光地、温泉地への入込みが顕著であり、観光地の利用客の平準化につながっている。さらに、冬の寒さを観光資源化する試みとして氷雪を素材にした冬祭りのイベントに加え、オホーツク沿岸の観光地のように、流水を観光資源として活用し観光客の拡大をみた例も明らかにしている。

### (3) 温泉の観光利用

都市への人口集中の深化と過密に伴い、住環境は劣化している。そして、都市生活者の自然への関心が高まっている。さらに、交通インフラの整備とモータリゼーションの進展によって日帰り観光圏は拡大している。この状況の中、旧来の山間地域も都市の観光・レクリエーション機能を担い、都市圏の一部を構成する可能性を示しているとも考えられる。したがって、都市生活者が、山奥の温泉にも関心を持つようになってきているもそのような背景があると考えられる。

例えば、奈良県南部紀伊山地の山懐に位置する十津川村もそうした観光地の1つである。この村は、林野の割合が村の総面積の96%の山村であり、人口は4,233人(2009年2月1日)である。しかし、人口の最も多かった1960年の15,588人に比べて3分の1以下になっている。また、村民の高齢化も進行し、70歳以上の老人保健資格取得者をみても人口の25%を上回っている。

さて、十津川村の3の温泉を合わせて「十津川温泉郷」と言い、奈良県で唯一、環境省の国民保養温泉地の指定になっている。そこで、この温泉地としての特長を最大限アピールするため、世界遺産への登録をみた「紀伊山地の霊場と熊野参詣道」を構成する熊野参詣道小辺路、大峯奥駆道の道普請、そして山々に育まれた環境の中から生まれた農林産物、河川の魚介類、さらに、それらを食材とした「めはりずし」や「よもぎ餅」などの名物を組み合わせた体験型ツアーを実施した。また、この試みは、温泉を軸として地元の産品をくくり、「心身再生の郷・十津川」の統一ブランドの一環である。

このことは、山間地域が都市機能の一部を分担するには単に温泉だけでは不十分であること。そして、都市生活者の求めるより高次のサービス需要へ

の観光地における取り組みの必要性を踏まえた実践と位置づけられる（小松原 2007a）。

### 2 観光地立地の社会条件

#### (1) 観光地の大衆化

石森（1996）は19世紀後半から20世紀全般にわたる近代観光の変化を、大きく3つの画期に分け、交通通信手段の変革、観光行動の担い手、事件・イベントの観点から論述している。

それによると、まず、最初のは19世紀の後半にヨーロッパで発生したものであった。国内旅行の大衆化に呼応する形で、富裕階級のエリートたちが好んで外国へ出かけるようになったのである。この状況は、鉄道や船舶などの交通手段の整備や電信などの通信手段の発達にあずかるところが大きい。また、この時代はヨーロッパ列強による植民地獲得競争も激化した時期でもあった。

次は、第一次世界大戦後のことで、アメリカにおいて自動車の普及を背景として休日に郊外でのレクリエーション活動を活発化した。そして、この時代に消費をリードした中産階級によるアメリカからヨーロッパへの観光旅行ブームが発生した。そして、移動手段として客船の大型化も進んだこと、大戦に従軍した将兵が地中海や欧州諸都市の魅力にふれたことにもよる。この結果、こうした動きに対して欧州諸国の中には政府観光局を設置する国々もでてきた。

最後は、1960年代に入ってからであり、国際観光の促進が国際政治・経済の重要課題とみなされるようになった。例えば、わが国では、東海道新幹線が開通し、1969年にはジャンボジェット機が就航して、一度に、大量に、早く旅客輸送が可能になった。いわゆるマス・ツーリズムの幕開けであり、東京オリンピックが開幕した1964年に観光目的の海外旅行が自由化され、海外旅行隆盛のきっかけとなった。

以上のように近代の観光にあっては、その恩恵に多くの人々が浴すようになるとともに、観光地は大衆化していったのである。

## (2) 都市集積の進展と観光地

日本国民の7割以上は都市で生活しており、そうした人々は山間地域に対して、自らの日常生活とは異なった自然環境のなかでの休息や様々な体験活動への期待が大きい。一方、山間地域にあっては、当該地域の資源を活用し、従来の山間地域の産業と結びつける形で新たな産業を再構成し、山間地域の自活を促そうと試みている。そして、ここで重要なのは、都市集積の利益の波及効果をどこまで山間地域において吸収できるかにある。

まず、観光の側面からの都市研究としては、Yamashita (2003) が性格の異なる3都市を比較しながらそれらに共通に存在するチャイナタウンの存立形態と観光資源としての位置づけに論及している。また、神頭 (2003) は都市の規模順位研究の成果を観光地研究への応用を試み、Suzuki (2003) は都市をガイドブックの記述から検討したものとして興味深いし、滝波 (2003) は都市機能の中で重要な役割を担うものの一つであるホテルに着目している。

## (3) 交通連絡の高速化・大量化と観光地

高速交通網の整備、航空機利用の普及によって、大都市圏から離れた地域における観光地の立地条件も変化している。例えば、小松原 (2007b, pp.59-64) は北海道を事例にモータリゼーションの進展と観光地の利用の特徴を論じている。また、旅行商品にも、マイカー・レンタカーの利用を前提とした観光形態が広範に普及していることからわかる通り、モータリゼーションは北海道の観光に大きな影響を与えたと考えられる。

さらに、釧路湿原国立公園利用者の旅行形態と利用交通手段の相関を居住地別に考察してみると、いずれの組合せにおいても道外客、中でも首都圏からのそれが最も多くなっている。そして、これを可能にしたのは、航空機の大規模化と地方空港への乗入れである。この結果、わが国最大の市場である東京と北海道東部とが、2時間以内で連絡され、この地域の観光地が首都圏の住民にとって身近なものになったと考えられる。

ただし、これまで建設された道路や空港などの施設・設備の維持・管理コストは、国や地方自治体いずれにとっても負担となっていることが多い (小

松原,2003a,p.47)。したがって、今後、20世紀から引継いだ資産を取捨選択し、再構築していく作業が加速化すると考えられる。こうした編集作業は行政による供給論理と納税者・利用者の感性の格差を調整していく過程でもある。また、観光客誘致にむけた施設・設備投資にあってもこの観点から、国や市町村や諸団体の既存の枠組みを超えた連携が必要になる。さらに、需要動向をしっかりと見極め、観光地の契り結ぶ新たなルートを調製し、立地条件の創造につなげることが重要になる。

### 3 観光地への関心と評価

#### (1) 観光地における立地条件の変化

社会的経済的変動によって観光地の立地条件に大きな変化が生じることがある。例えば、いわゆる「東欧革命」(以下、「革命」と略記する)を経た1990年代の東ヨーロッパ(東欧と略記する)や隣接国の観光地の利用者層や観光行動の変化に関する一連の研究をあげることができる。

この点に関して呉羽(1997)は、「革命」以前には自由な移動に制限を設けられていた旧西ドイツやオーストリアなど、西側の国々に対して、「革命」後には国境が実質的に開放され、観光客の流動も制限が解消されたと指摘し、オーストリアの観光客の動向を事例に分析している。それによると、オーストリアへの東欧諸国からの観光客は、① 1988年頃より宿泊客数が急激に増加、しかし、② オーストリアにおけるインバウンド全体にしめる構成比は大きくなく、さらに③ 東欧諸国の中でも国ごとの差異が確認できたこと明らかにしている。中でも③に関しては、ハンガリーとチェコからのインバウンドツーリストを分析した結果、買物を主な目的とする日帰り観光であると結論付けている。

#### (2) 観光地への関心

産業のサービス化・ソフト化の中で情報通信技術の開発の成果を利用した観光地に関する情報提供が進展をみている。例えば小松原(2004)は、インターネット通信販売におけるアンケート調査の結果を利用し、膨張する大都市圏、中でも東京と大阪を中心とする圏域の居住者の奈良県の観光地に関す

る意識調査をもとに、利用者の側面からの観光地の分析を試みた。その分析結果から、インターネットの利用件数は実際の人口規模に優るとも劣らない規模の大都市圏への集中状態を示しており、情報サービスの利用と供給が大都市圏へと集まっている。

周知の通り、奈良県の観光地、中でも奈良市とその近隣の観光地の知名度は抜群であり、さらに古代史ブームも追い風となって飛鳥周辺の観光地も根強い人気がある。そして県南部へも関心が拡大している。しかし、関心があるということは観光行動にとっての重要な契機となることは確かであるが、実際の観光行動を保証するものではない。さらに、インターネットの利用によって異なる観光地の情報を同時に比較可能な状態にある。また、訪れたい都道府県においてもわかるように、遠距離の観光地が競争関係になることを明らかにしている。

### (3) 観光地に対する評価

交通インフラの整備とモータリゼーションの進展によって日帰り観光圏は大きく拡大した。しかし、山間地域が都市機能の一部を分担するには単に自然観光資源が存在するだけでは不十分である。つまり、より高次のサービスの質を都市生活者は求めるので、都市生活者を引き付けるためのそこでしか得られない仕掛けや魅力が必要となるのである。したがって、宿泊観光地として、山間地域の自然や歴史をそうしたニーズにどのように適応させていくかが、大きな課題である。

そこで、こうした課題に接近するために実施された都市住民アンケート調査の結果、小松原（2003b）によると、回答者の居住地の圏域別、性別、年齢別、職業別のいずれにあってもそれぞれの属性の中での階層間に、山間地域の魅力に関して差異はみられず、高い関心を示していることが明らかになっている。

すなわち、そうした人々は山間地域に対して、自らの日常生活とは異なった豊かな自然環境の中で休息や様々な体験活動への期待が大きいと考えられ、温泉も魅力の1つとなっている。そして、このことは都市生活者において、健康志向の高まり、大都市圏において工夫を凝らした入浴施設が盛況を

## 観光地の立地条件

呈していることから明らかである。したがって、この点を踏まえると、山間地域における需要の拡大を期待できる。

以上の考察から、今後、観光・レクリエーションにあっても少量他品目化が一段と進むと考えられ、このような段階にあって、需要の取込みのためには個別の観光地の対応だけでなく、隣接地域との連繋が不可欠である。したがって、広域的な連携による観光・レクリエーション機能の整備を考える上では、サービス集積を念頭に置いた戦略的な連絡網の形成を考える必要がある。そのためには、都市圏における機能地域の中に山間地域を位置づけ、人の流れと意識の動きを構造的に把握した観光地の立地条件と立地因子の分析が必要になる。

### まとめ

地理学にあっては観光地の立地条件に関する研究がこれまで多くなされてきた。その内容は観光地に関する立地の自然条件を踏まえつつ、社会条件の整備と状況を記述したものが多。したがって、本章ではこれまでの観光地に関する豊富な立地条件研究の成果を自然条件と社会条件の両側面から整理し、需要者の興味関心、評価といった立地因子の側面からのアプローチの必要性と研究動向について述べた。

さて、これまでの考察は以下のようにまとめられる。まず、① 大都市から隔たった国土の縁辺地域や山間地域では、所与のものとして受止められてきた自然条件の特長を活かしつつ観光地としての差別化を試み、地域振興に望みをつないでいる。そして、② 近代観光は都市の発達と密接不可分である。都市はそのものが観光対象であるとともに、観光地にとっては市場でもある。都市と観光地を結ぶ輸送手段の革新による社会条件の変化は観光地の立地にも影響を及ぼしている。最後に、③ 社会条件の変化は移動手段のみならず、情報入手に関しても指摘できる。さらに社会制度の変革も観光客の流動を変える。このような観光客の動きの計数、需要者の大部分を占める都市生活者の意識・関心を把握するための手法を磨き、観光地の立地因子の研究を深化することが必要である。

## 論文

これまでの論述より、都市への人口の集積は一面では、観光・レクリエーション需要の拡大につながり、山間地域もその機能地域として位置づけられる可能性を秘めていることを示している。しかし、産業構造の高度化に伴い、労働に質的变化を生じたことを考えてみると、都市生活者の観光に対する需要は多様化し、その要求水準も高度化しているに違いない。そして、この点を考え合わせて可能性を有効需要に結びつける工夫、すなわち、立地因子の分析を観光サービス供給の側にも求められている。

## 文献

- 石森秀三（1996）「観光革命と20世紀」石森秀三編著『観光の20世紀（20世紀における諸民族文化の伝統と変容3）』pp.11-26、ドメス出版
- ウェーバー、アルフレッド（1986）『工業立地論』篠原泰三訳、大明堂
- 呉羽正昭（1997）「オーストリアにおける中欧東部地域からの宿泊客の滞在パターンとその変化」『愛媛大学法文学部論集人文科学編』3：pp.123-139
- 神頭広好（2003）「ランク・サイズモデルが意味するもの－観光地への応用－」『日本観光学会誌』43：p.13-19
- 小松原尚（2002）「北海道の河川流域におけるレクリエーション地」『奈良県立大学研究季報』12（3・4）：pp.73-80
- 小松原尚（2003a）「地理学からのアプローチ」神木哲男ほか監修『地域創造へのアプローチ』pp.46-47、IBC コーポレーション
- 小松原尚（2003b）「都市生活者からみた山間地域」『奈良県立大学研究季報』14（2・3）：pp.157-164
- 小松原尚（2004）「2大都市圏居住者の奈良県観光への関心」『奈良県立大学研究季報』15（2・3）：pp.13-21
- 小松原尚（2005）「北海道における観光地の立地条件」『奈良県立大学研究季報』16（1）：pp.19-31
- 小松原尚（2007a）「様々な『地元』」『地理（古今書院）』52（2）：pp.33-38
- 小松原尚（2007b）『地域からみる観光学』大学教育出版
- 横山秀司（1998）「北アルプス、立山・室堂における観光と景観収支」『九州産業大学商経論叢』39（3）：pp.181-204
- 渡辺悌二・古畑亜紀（1998）「大雪山国立公園、旭岳ロープウェイと姿見の池遊歩道の利用環境の改善の方向性」『北海道地理』72：pp.1-12
- SUZUKI Koshiro（2003）A Comparative Study of the Spatial Descriptions in Tourist Guidebooks, *Geographical Review of Japan*, 76：pp.1-21
- YAMASHITA Kiyomi（2003）Formation and Development of Chinatowns as

## 観光地の立地条件

Tourist Spots in Yohama,Kobe and Nagasaki. *Geographical Review of Japan* 76 :  
pp.910-923